

# 否定副詞ケッシテの意味分析

杉 村 泰

## 1. はじめに

本稿は日本語の否定副詞「ケッシテ」の意味分析を行ったものである。従来、「ケッシテ」の分析は、「ゼンゼン」と比較される場合と、「ゼツタイニ」と比較される場合があった。このうち前者の研究では、「ゼンゼン」が否定の対象面で働くのに対し、「ケッシテ」は否定の作用面において話し手の否定的態度を強調すると説明されてきた。しかし、こうした説明は「ゼンゼン」との違いは区別できても、否定構文に使われる「ゼツタイニ」との違いは曖昧なままである。なぜならば、次の(1a)も(1b)もともに「話し手の否定的態度を強調する」と言えるからである。

- (1) a. 不死鳥はケッシテ死なない。  
b. 不死鳥はゼツタイニ死なない。

一方、後者の研究では、「ケッシテ」は発話の前提を意識する表現とされ、それを意識しない「ゼツタイニ」と区別されると説明されてきた。しかし、単に前提と言うのでは曖昧で、どのような前提なのかを説明する必要がある。実際、次の(2a)(2b)が不自然で(3a)(3b)が自然なのは、いずれの副詞もある前提の下で使われているからである。

- (2) 夕飯はもう食べましたか？  
a. ? いいえ、ケッシテまだ食べていません。  
b. ? いいえ、ゼツタイニまだ食べていません。
- (3) 夕飯はもう食べちゃったんじゃないですか？  
a. いいえ、ケッシテまだ食べていません。  
b. いいえ、ゼツタイニまだ食べていません。

このように、「ケッシテ」は如何なる前提の下で、如何なる話し手の否定的態度を表すのかを説明する必要がある。以下本稿では、「ケッシテ」は「当該の事態の成立があ

りうるとする想定に対して、如何なる条件の下でもその事態が成立しないことを表す表現」であることを指摘する。すなわち「ケッシテ A でない」という表現は、「誰が何と言おうと（何があるうと、如何なる場合にも）A という事態は生じない」ということを強調する表現であることを主張する。

## 2 . 否定と否定副詞

日本語の副詞には、「マサカ」「ケッシテ」「ゼンゼン」「メッタニ」「スコシモ」のように否定構文に現れて否定的意味を表すものがある。これら否定副詞はいずれも文の否定成分と呼応する点で共通している。しかし、それぞれの持つ構文的役割は決して一様ではない。本節では他の否定副詞との比較を通じて「ケッシテ」の特徴を見ていく。

### 2 . 1 「マサカ」

従来「マサカ」の意味は、事態成立の可能性を否定する（森田1988、飛田・浅田1994、小学館辞典編集部1994、Makino and Tsutsui 1995）とか、否定推量を表す（森本1994）と説明されて来た。たしかに、(4 a) (4 b) のように「マサカ」はそうした場面で使われることが多い。しかし、(4 c) では事態が想定外のものであることを表しているにすぎず、事態成立の可能性を否定したり否定推量を表しているわけではない。

- (4) a . マサカ太郎が来るはずがない。
- b . マサカ太郎は来るまい。
- c . マサカ太郎が来るとは思わなかった。

こうした事実により、可能性否定や否定推量は構文に帰せられるものであり、「マサカ」自体は「当該の事態が想定外のものであることを表す表現」であると結論される。<sup>1)</sup>

こうした「マサカ」の特徴は(5 a) の文法性判断に反映されている。(5) の各文はいずれも否定の態度を示したものであるが、「ケッシテ」「ゼンゼン」「メッタニ」「スコシモ」が使えるのに対し、「マサカ」だけは使えない。

- (5) a . \* 太郎はマサカ風邪を引かなかった。
- b . 太郎はケッシテ風邪を引かなかった。
- c . 太郎はゼンゼン風邪を引かなかった。
- d . 太郎はメッタニ風邪を引かなかった。
- e . 太郎はスコシモ風邪を引かなかった。

これは「マサカ」が何か事態を否定するというものではなく、その事態が想定外のものであることを強調する表現であるからである。それゆえ「マサカ太郎が風邪を引くとは思わなかった」のように、想定外の意味を表す場合に自然な表現となるのである。

## 2.2 「ケッシテ」と「ゼンゼン」

### 2.2.1 二種類の否定構文

次に「ケッシテ」と「ゼンゼン」の違いについて考える。それには、まずはじめに田中（1983）に従って二種類の否定構文を区別しておく必要がある。

田中（1983）は「否定文には二様の構造把握が可能である」（p.77）として、「この本は面白くない」という表現に二つの解釈があることを指摘した。

（6）この本は面白くない。

a. 作用構造：「この本」を「面白い」と呼ぶことへの否認

b. 対象構造：「この本」が、「面白い」と呼ぶことが認められないような、そのようなありかたにおいてあると見る理解

これを言い直すと、（6 a）は「この本はおもしろい」と考える前提に対して「そうではない」と否定する表現、（6 b）は「この本」の属性について「『面白さ』の度が0である」と述べる表現であると説明される。

こうして、次に田中（1983）は否定副詞にも否定の作用面ではたらく「ケッシテ」や「ダンジテ」などと、否定の対象面ではたらく「ゼンゼン」や「サッパリ」などの二種類があることを指摘した。

（7）a. この本はケッシテ面白くない。

（「この本」を「面白い」と呼ぶなどおおよそできない）

b. この本はゼンゼン面白くない。

（この本には、面白さというものがおおよそ見当たらない・欠けている）

田中（1983）では取り上げられていないが、対象構造の否定構文には「ゼンゼン～ない」のように事態の度を「0」とするものだけでなく、「メッタニ～ない」のようにその度が「低い」ことを表すものもある。こうした例を含め、いわゆる否定構文には、ある前提に対してそれを否定する種類のものと、当該の事態の成立する度が0あるいは低いことを示す種類のものとがあることが分かる。

2 .2 .2 二種類の「ない」

本田 (1981 a、1981 b) は「ない」と「ケッシテ」の共起関係に着目し、共起する場合と共起しない場合とがあることを指摘した。

- ( 8 ) a . \* 仕事をする気が決して無い。( 本田1981 a )  
b . \* ここにはあなたの読むような本は決して無い。( 本田1981 a )  
( 9 ) a . ここでは強き者が辱しめられることは決してない。( 本田1981 b )  
b . この二人の画家の vision が互いに抵触するようなことは決してない。( 本田1981 b )

本田 (1981 b) はこうした事実を根拠に、一般に否定表現とされている形容詞「ない」が肯定表現であることを主張し、話し手の否定的断定を表す「ない」と区別した。<sup>2)</sup>

〔名詞 + が / は - ない〕は、話し手の否定的断定を表わすものではないということの意味する。この点は「無い」が「有る」の否定ではなく、それ自体「少い、足りない」と同じく形容詞であり、「無」という事態を話し手の判断としていわば「肯定的」に表現するものと考えれば十分うなづけるものと思われる。( 本田1981 b :222)

本稿でも形容詞「ない」は意味的には非存在という否定的な意味を持ちながら、文法的には「ある」と同じ肯定文を作ると考える。<sup>3)</sup>

ところで、( 8 ) は「ケッシテ」を「ゼンゼン」に置き換えると容認可能な文となる。

- ( 10 ) a . 仕事をする気がゼンゼン無い。  
b . ここにはあなたの読むような本はゼンゼン無い。

「ゼンゼン」が形容詞の「ない」と共起できるということは、これが「ケッシテ」のようなある前提に対する否定を表す副詞ではないことを示している。

2 .2 .3 構文の意味と副詞の意味

以上、先行研究では否定構文に文法的に異なる二種類のを認め、「ケッシテ」と「ゼンゼン」もそれぞれに対応することを明らかにした。本稿でもこうした考えに従うことにする。

しかし、ここで注意したいのは、先行研究では「構文の意味」と「副詞の意味」とが

あまり区別されずに論じられてきた点である。たとえば、本田(1981b)は「ケッシテ」を「話手の、ある事態に対する否定的断定と呼応し、それを強調する」(p.7)と定義した。しかし、この「ある事態に対する否定的断定」は「～ない」という否定構文に帰せられるものである。そのため、ここから「ケッシテ」自体の意味を抽出すると、単に「(否定的断定を)強調する」としか説明されていないことが分かる。したがって、研究上には、どのように否定的断定を強調しているのかを説明することが必要となる。(これは、「ゼンゼン」が単に否定を強調するのではなく、「頻度、数、量などに広く使われ、事態の成立する程度が0であることを表す」と説明されるのと同じことである。)<sup>4)</sup>

なお、「ゼンゼン」が程度量を強調することは、これが程度量の関与する事態にしか使えないことから証明される。<sup>5)</sup>

- (11) a . 今の調子では、阪神はあと数年ゼンゼン優勝しないだろう。  
 b . \*今の調子では、今年の阪神はゼンゼン優勝しないだろう。

以上2節では、同じ否定副詞でも「マサカ」と「ケッシテ」と「ゼンゼン」では構文的役割が異なることを指摘した。次に3節では、「ケッシテ」がどのように否定的断定を強調しているのかを分析する。その際、否定構文の意味とは別に副詞自体の意味を抽出することに重点を置くことにする。

### 3 . 発話の前提

#### 3 .1 「ケッシテ」と「ゼツタイニ」

田中(1983)や本田(1981b)によって、たしかに「ケッシテ」と「ゼンゼン」の違いは説明できる。しかし、こうした説明では「ケッシテ」と否定構文での「ゼツタイニ」の違いが曖昧なまま残る。<sup>6)</sup>なぜならば、「この本はケッシテ面白くない」と「この本はゼツタイニ面白くない」は、ともに「この本」を「面白い」と呼ぶことへの否認を表明し、その絶対性を強調していると言えるからである。

たしかに、(12)を見るかぎり「ケッシテ」と「ゼツタイニ」は置き換えが可能であり、さほど意味が変わるようには感じられない。

- (12) a . 「おまえがどんな危害にあおうともけっして死なぬのは私が守っているおかげですよ」(略)「おれはぜったい死なないからだなのさ」(手塚治虫『ブッダ』)  
 b . 「おまえがどんな危害にあおうともゼツタイニ死なぬのは私が守っているお

かげですよ」(略)「おれはケッシテ死なないからだなのさ」

しかし、(13)(14)を見ると、「ケッシテ」と「ゼツタイニ」には何らかの使い分けのあることが分かる。

(13) a . 現地にはトンゲ族という人々が住んでいます。トンゲの人々は過去に何人かの日本人研究者を迎えているので、日本人自身は決して珍しい存在ではなかったのですが、女性の野性動物調査官というのは初めての経験だったようです。(養老孟司・長谷川真理子『男の見方 女の見方』)

b . \* 現地にはトンゲ族という人々が住んでいます。トンゲの人々は過去に何人かの日本人研究者を迎えているので、日本人自身はゼツタイニ珍しい存在ではなかったのですが、女性の野性動物調査官というのは初めての経験だったようです。

(14) a . あれは、磯良だった。絶対に、まちがいない。(貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』)

b . \* あれは、磯良だった。ケッシテ、まちがいない。

そこで、次に「ケッシテ」と「ゼツタイニ」の違いを見ていくことにする。

### 3.2 前提

一般に、「ゼツタイニ」は否定構文にも肯定構文にも使えるが、「ケッシテ」は否定構文にしか使えないことが知られている。これに加え、森田(1988)は「ケッシテ」がある前提を踏まえた表現であることを指摘している。<sup>7)</sup>

述語の否定部分と呼応して、その否定表現を強める。“ なにか前提があっても、そうではない / そうはしない / そうはならない ” という話し手の強い打消し意志を表す。**分析**「私は外国人ではありません」と言えば、単に、外国人にあらずという事実を述べているだけだが、これが「私は決して外国人ではありません」となると、日本語より外国語のほうが上手だとか、日本人ばなれした外見・風貌をしているけれどもとか、日本人らしからぬ名前であるけれどもなど、さまざまの不利な前提が加わる。それでもなおかつ外国人ではないのだという強い主張をする気持ちである。(森田1988 : 408)

こうした説明は、原(1992)の「ある肯定的事態の不成立、即ち、肯定的予測に対す

る否定である」( p 66) という定義に集約されている。実際、「ケッシテ」は他者の思い込みや固定観念を否定する場面において典型的に使われる。

- (15) vi はモードのあるエディタであるため、若干使いにくいと言われることがあります。しかし私は、決してそんなことはないと思っています。(坂本文『たのしいUNIX』)
- (16) 笑いは自然におこるもので、自分の力ではどうにもならないと思っている人がいる。だが、少し考えてみればわかるように、決してそんなことはない。(福田健『ユーモア話術の本』)
- (17) 米国やヨーロッパでは、「日本の輸入が輸出に比べて少ないのは、日本の市場が閉鎖的であるためであり、市場を開放すれば日本の輸入は増大し、その経常収支の黒字も減少する」と考える人が多い。しかし、日本の輸入関税率と輸入数量制限品目数は世界でも最低の水準であり、この点に関しては日本の市場は欧米に比べて決して閉鎖的とはいえない。(岩田規久男『国際金融入門』)

また、次の例も見かけ上は前提となるものが現れていないが、アナウンサーの気持ちとしては「ローズの当たりをいい当たりだと思う人がいるかもしれないが……」といった、聞き手の予想を前提とした表現となっている。

- (18) ローズの当たりは決していい当たりではありませんでした。(CBC ラジオ「プロ野球中継 横浜 - 中日」1999 .9 . 18)

一方、次の例でははっきりとした前提は見えにくい。(19)は「神と悪魔はいつ如何なる場合にも相容れることはない」ということを強調しているのであって、特に誰かの考えを否定するというものではない。強いて言えば「神と悪魔は相容れる」とする誰かの考えを否定していると言えなくもないが、少し無理があるであろう。

- (19) ヨーロッパ中世の魔女といえば、キリスト教文化における神と悪魔という、決して相容れない対立項の中から生じた存在として知られている。(宮田登『ヒメの民俗学』)

この場合の「ケッシテ」は、誰かの考えというよりは、一般的な成立可能性を打ち消していると考えた方がよい。こうした場合を含め、「ケッシテ」は「当該の事態の成立がありうるとする想定」を前提として、それを否定する表現であると考えられる。

さて、「ケッシテ」が前提を必要とすることは次のことから分かる。原田（1982）は、(20)～(22)のような非意志性を表す述語に対し、如何なる否定副詞に係るのかをテストし、「ケッシテ」が使えるのは(21)のみであると結論した。

(20) その事実については( )知りませんでした。(原田1982)

(21) その本は( )売れなかった。(原田1982)

(22) 洋服はまだ( )仕上がっていない。(原田1982)

しかし、実際には(20)と(22)も文脈さえ補えば適確な文として成り立つ。

(20)'(あなたは私が知っていたと思っているかもしれませんが、)その事実についてはケッシテ知りませんでした。

(21)'(その本は売れるのではないかと思われていたが、)その本はケッシテ売れなかった。

(22)'(あなたはもう洋服が仕上がっていると思っているかもしれないが、)洋服はまだケッシテ仕上がっていない。

こうした事実により、「ケッシテ」は何らかの前提を必要とした表現であることが証明される。

### 3.3 構文の意味と副詞の意味

先に示したように原（1992）は、「ケッシテ」の意味を「肯定的予測に対する否定」であるとした。しかし、これは「ケッシテ～ない」という構文の意味であり、「ケッシテ」自体の意味ではないことに注意する必要がある。

たしかに、(23a)が対象構造と作用構造の二通りに解釈できるのに対し、(23b)は作用構造の解釈にしかない。そのため、「ケッシテ」が「肯定的予測に対する否定」を強調するのは間違いない。

(23) a . この本は面白くない。

b . この本はケッシテ面白くない。

しかし、「肯定的予測に対する否定」は(23a)でも表すことができるため、こうした意味自体は作用構造の否定構文に帰せられるものであると考えられる。そもそも否定とは肯定を前提とする表現であるため、否定的断定は必然的に肯定的予測を前提としてい

るのである。<sup>8)</sup>

先行研究では構文の意味と副詞の意味が曖昧に捉えられてきた感がある。しかし、以上の理由から本稿では両者を分けて考えることにしたい。

#### 4. 「ケッシテ」の意味

次に、否定構文の意味とは独立した「ケッシテ」自体の意味を分析する。その結果、「ケッシテ」は「如何なる条件の下でも当該の事態の成立が成立しないことを表す表現」であることを明らかにする。

分析は「ゼツタイニ」との比較によって行う。両者には次のような違いがあるが、こうした違いの生じる原因を探ることによって「ケッシテ」の意味が明らかとなる。

「ゼツタイニ」は否定構文にも肯定構文にも使えるが、「ケッシテ」は否定構文にしか使えない

「ゼツタイニ」は前提を意識しないが、「ケッシテ」は前提を意識する

##### 4.1 「譲歩」の意味

森田(1989)は(24a)と(24b)を比較して、「ケッシテ」と「ゼツタイニ」の違いを説明した。森田によると、(24b)は「よくない」という事態に対して譲歩の余地は全くなく、たとえどんな条件がそこにあったにしても、やはり例外は認められないことを表すのに対し、(24a)は「今回はやむを得ないが、それは決してよくはない」や「それは決してよくはないが、そうかと言って他に方法は見あたらないし……」など、一応「よくない」と認めつつも例外を設ける、譲歩を前提とした判断を表すと説明されている。

(24) a . それは決してよくない。(森田1989)

b . それは絶対によくない。(森田1989)

たしかに、(24a)と(24b)を比べるとそのような違いが感じられる。しかし、「不死鳥はケッシテ死なない」と言えば100%死なないのであって、譲歩の余地はありえない。したがって、譲歩云々は「ケッシテ」と「ゼツタイニ」を区別する根本的な要因ではないと考えられる。

##### 4.2 全部否定・部分否定

一方、飛田・浅田(1994)は「ケッシテ」は部分否定、「ゼツタイニ」は全部否定を

表すと説明している。

- (25) a . 決して美人ではない。(美人とは言い切れない)(飛田・浅田1994)  
b . 絶対に美人ではない。(不美人である)(飛田・浅田1994)
- (26) a . 決してやさしくない。(やさしいとは言い切れない)(飛田・浅田1994)  
b . 絶対にやさしくない。(むずかしい)(飛田・浅田1994)

たしかに(25)と(26)を見ると、そのような違いが感じられる。しかし、「ケッシテ」が部分否定を表すとすると、不死鳥の例が説明できなくなるし、今度は「カナラズシモ」との区別できなくなる。

- (27) カナラズシモ美人ではない。(美人とは言い切れない)
- (28) カナラズシモやさしくない。(やさしいとは言い切れない)

本稿では、「ケッシテ」はあくまでも全部否定を表す表現であり、譲歩や部分否定の意味は派生的に生じることを指摘する。そもそも「ケッシテ」と「ゼツタイニ」は、譲歩の有無や全部否定・部分否定の違いを考える以前に、構文的な係り方に違いのあることを考える必要がある。

- (29) a . ケッシテ [美人である] ではない。  
b . ゼツタイニ [美人ではない]
- (30) a . ケッシテ [やさしい] ではない。  
b . ゼツタイニ [やさしくない]

まず「ゼツタイニ」から見ていく。「ゼツタイニ」は肯定表現にも付き、「ゼツタイニ美人である」や「ゼツタイニやさしい」はその肯定的事態の成立が100%であることを強調する。同様に、否定構文での「ゼツタイニ」はその否定的事態の成立が100%であることを強調し、「美人ではないコト」や「やさしくないコト」の絶対性を表す。要するに、「ゼツタイニ」は肯定的事態にしる否定的事態にしるその事態の成立を100%認める表現なのである。<sup>9)</sup> 決してある前提に対する否定を表すわけではない。<sup>10)</sup>

一方、「ケッシテ」は発話の前提となる「美人である」や「やさしい」を否定し、そうした事態の成立がありえないことを強調する。この場合、「美人である」とか「やさしい」可能性は一切ありえないので、「ケッシテ」は全部否定を表すと考えられる。それに関わらず、「ケッシテ」に部分否定の意味が感じられるのは次の理由によるもの

と思われる。すなわち、「美人である」や「やさしい」の打ち消しは、必ずしも「全然美人ではない」や「全然やさしくない」を意味するのではなく中間的な場合もある。そのため、部分否定や譲歩の意味が感じられるのである。そういう意味では「ケッシテ」が部分否定を表すと言えなくもない。しかし、その場合でも「美人である」や「やさしい」という前提の成立可能性は一切排除している。<sup>11)</sup>この点で、「美人である」可能性や「やさしい」可能性を残す「カナラズシモ」とは異なる。<sup>12)</sup>

#### 4.3 「ケッシテ」による強調機能

次に「ケッシテ」が否定構文において如何なる強調機能を表すのか見る。それには、反復的文脈と一回的文脈に分けて考えると分かりやすい。次の(31a)(31b)において、「ケッシテ」はいずれも阪神が優勝する可能性のないことを強調している。ここで(31a)は数年間のうちに一回でも優勝する可能性を強く否定し、(31b)はその年に優勝する可能性を強く否定している。

- (31) a . 今の調子では、阪神はあと数年ケッシテ優勝しないだろう。(反復的文脈)  
 b . 今の調子では、今年の阪神はケッシテ優勝しないだろう。(一回的文脈)

すなわち、一般に「ケッシテ」は「反復的文脈」では当該の事態があらゆる場面で成立しないことを表すのに対し、「一回的文脈」では当該の事態があらゆる条件の下で成立しないことを表すと説明できる。

[反復的文脈] 場面1、場面2、場面3、……あらゆる場面で不成立

[一回的文脈] 条件1、条件2、条件3、……あらゆる条件の下で不成立

これをさらに一般化すると、「ケッシテ」は如何なる条件の下でも当該の事態が成立しないことを表すと説明できる。否定構文から抽出される「ケッシテ」自体の意味は、このような強調機能であると考えられる。

#### 4.4 主観性

従来、「ケッシテ」は主観的表現なのか客観的表現なのか議論されてきた。主観・客観の定義は研究者によって異なるが、本稿では中右(1980)に基づき「発話時における話し手の心的態度」を表すものを主観的表現、そうでないものを客観的表現であるとする。

工藤(1983)は次の文法性判断を根拠に、「ケッシテ」は「クローズ性の弱い連体句

に収まりにくい」( p .190 ) と論じている。<sup>13)</sup>

(32) {たいして / ? けっして} おもしろくない話 ( 工藤1983 )

(33) cf. けっして { おもしろくはない話 / おもしろいとは言えない話 } ( 工藤1983 )

(34) きっと {たいして / ? けっして} おもしろくないだろう。( 工藤1983 )

これに対し、原 ( 1992 ) は工藤 ( 1983 ) の指摘を一応認めつつも、「動詞が連体修飾句になる場合は、“決して”を用いることができる」( p .76 ) としている。しかし、「ケッシテ安くない学費」や「ケッシテ苦くない薬」という表現があるように、「ケッシテ」は動詞に限らず形容詞の連体修飾成分にもなる。こうした「ケッシテ」は、発話時から独立したものであるため、客観的な表現であると考えられる。<sup>14)</sup> 事実、次の文において「十万人という数字がケッシテ少くないコト」や「この問題がケッシテ無視できないコト」は、発話時から独立した一般的事実を表している。

(35) 日本から朝鮮に帰国した人はおよそ十万人。私の友人、知人も何人も帰国している。十万人という数はけっして少くない数字である。( 萩原遼『ソウルと平壤』)

(36) 消費者への損害補償の仕組みの制度化も、けっして無視できない問題である。  
( 新藤宗幸『行政指導 官庁と業界のあいだ』)

一方、次のような「ケッシテ」は、発話時における話し手の主張、意志、命令を表すため、主観的な表現であると考えられる。

(37) 無知はそれを自覚しさえすれば、決して恥ずかしいことではない。( 佐高信『タレント文化人100人斬り』)

(38) 「盤台さんありがとう ご恩はけっして忘れません」( 手塚治虫『フィルムは生きている』)

(39) 「ダミー役の検事たちがワシントン入りするから、中心街にはけっして近づくな」( 魚住昭『特捜検察』)

結局、「ケッシテ」は当該の否定表現が「発話時における話し手の心的態度」を表すかどうかによって、主観的性質を示すこともあれば、客観的性質を示すこともあるのである。先行研究では「ケッシテ」の主観性を一つに定めようとしているが、本稿では場合によっていずれにも使われると考える。

## 5. まとめ

以上、本稿では日本語の否定副詞「ケッシテ」の意味について分析し、「当該の事態の成立がありうるとする想定に対して、如何なる条件の下でもその事態が成立しないことを表す表現」であることを明らかにした。本稿の特徴は、否定構文の意味と「ケッシテ」の意味とを区別して分析した点にある。一般に両者は曖昧に議論されてきたが、これを区別することにより「ゼツタイニ」との違いが明らかとなるのである。また、従来言われていた「譲歩」や「部分否定」の意味については、派生的に生じるものであることを指摘した。今後は「ケッシテ面白くない」のような表現が不自然に感じられやすい理由について考えることにより、さらに精密な意味記述を行っていくことが必要である。

### 注

- 1) 詳しくは杉村(2000)を参照。
- 2) 石神(1990)は、否定構文を形容詞「ない」を述語とする「～がない」構文と、述語に助動詞「ない」を持つ構文の二つに区別し、「～がない。」という形容詞文が非存在という否定的内容を肯定形式で表すということは、日本語の構文における否定ということを考える上で注目されてよい問題である」(p. 61)と論じている。
- 3) 文法的に「ある」の否定は「ありはしない」「あらず」、「ない」の否定は「なくはない」である。その証拠に、(8b)を(i a)(i b)のように変えると容認可能な文となる。これは(8b)が単に本の非存在を表しているのに対し、(i a)(i b)は「ここにあなたの読むような本がある」という前提を否定しているためである。
  - (i) a. ここにはあなたの読むような本はケッシテありません。
  - b. ここにはあなたの読むような本はケッシテありはしません。
- 4) この点で「メッタニ」や「スコシモ」との差異が出る。
 

「メッタニ」: 事態の成立する頻度が非常に低く、まれにしか起こらないことを表す。(一回的文脈で「ウカツニ」や「ムヤミニ」の意味で使われる場合もある)

「スコシモ」: 事態の量的な程度がほんのわずかもないことを表す。(数的な程度の場合は、一ツモ、一本モ、一度モなどが使われる)
- 5) これに対し、「ケッシテ」は程度量とは関係なく機能する。その証拠に、程度量の関与する事態にも関与しない事態にも使える。
  - (i) a. 今の調子では、阪神はあと数年ケッシテ優勝しないだろう。
  - b. 今の調子では、今年の阪神はケッシテ優勝しないだろう。

次の文法性判断の違いも、命令(禁止)や当為に程度量がないことから説明できる。

  - (ii) a. あなたはケッシテ本を読むな。
  - b. \*あなたはゼンゼン本を読むな。
  - (iii) a. あなたはケッシテ本を読むべきではない。
  - b. \*あなたはゼンゼン本を読むべきではない。

「～するな」や「～するべきではない」は、話し手の否定的態度を表すため「ケッシテ」と共起するが、事態の程度量を表すものではないため「ゼンゼン」とは共起しないのである。

6) 一般の国語辞典でも、「ケッシテ」は「ゼツタイニ」とほぼ同義であるかのように記述されている。

[けっし - て 決して] (副) あとに否定、禁止の語を伴って用いる。絶対に (...ない)、断じて (...するな)。「御好意は決して忘れません」「決して死ぬな」(『現代国語例解辞典』第二版)

けっし - て【決して】(副) 絶対に。断じて。「私は - うそを申しません」用法 あとに打ち消しの語を伴う。(『旺文社国語辞典』第八版)

けっして ①【決して】(副) その事を強く否定したり、禁止したりする意を表わす。「 - [=どんな点から考えても] 不自然ではない・彼は - [=どんな事が有っても] 怒らない・ - [=断じて] 許さないぞ・ - [=絶対に] 忘れてはならない」(『新明解国語辞典』第四版)

7) 飛田・浅田(1994)、小学館辞典編集部(1994)にも同様の指摘がある。

「「けっして」は、ある前提をふまえてそれにもかかわらず強く打ち消すというニュアンスがあり、前提の考えられない単なる打消しの強調としては用いられない。」(飛田・浅田1994: 144)

「「決して」は、否定の言葉と呼応して、話し手の強い打ち消しの意志を表わす。そのとき、客観的にみて無条件に否定するのではなく、ある前提にもかかわらず、という譲歩の気持ちがある。」(小学館辞典編集部1994: 1008)

8) 丹保(1980)は「否定は常に肯定を前提にしているのに対して、肯定は否定を前提としているわけではなく、直接的な認識によっていると考えられる」(p. 128)と述べ、小川(1984)も「始めから「無」の認識は有り得ない。「当然そこにあるべきもの」として認識され、事実、それが在るのか無いのかを確認して、無いと判断したとき、「ない」と表現するのである」(p. 29)と述べている。

9) 先行研究で「ゼツタイニ」が前提を意識しないと記述されているのも、これ自体が否定を表すわけではないからである。

10) その証拠に、「ゼツタイニ」は形容詞の「ない」とも共起する。

(i) ここにはあなたの読むような本はゼツタイニ無い。

11) 次の例も同様に、「私はホームランの魅力を否定する」という前提そのものは全部否定されている。

(i) 私はホームランの魅力はけっして否定しない。それどころか、松井の一発どでかい度肝を抜くようなホームランは相当に好きである。しかし、それとは別に、全体的にスピードとスリルに満ちた「走る野球」とでもいうか、今、多くのファンはそれを求めているような気がする。(矢島裕紀彦『大矢明彦ベ이스ターズの真実』)

12) 「ケッシテ」と「カナラズ」の違いについては、次号で詳しく論じることにする。

13) これは主観性の問題ではなく、別の要因に起因すると思われる。次のような例も「決して面白くはない」と言った方が落ち着きがいい。この理由については今後の課題である。

(i) 記念すべき第1回の「嘘ホント」は、管理人の昔話です。話す前に確認しときます  
が、決して面白くないです(爆死)。(http://www21.freeweb.ne.jp/art/rinahp/file/file1.html)

- 14) 北原(1975)は「君の意見を決して受け入れない人は... のような表現が可能であるのも、「決して」が陳述修飾成分に属するものではないからである」(pp 31 - 32)として、「ケッシテ」を客観・主観の中間的なものとした。これに対し、本稿では「発話時における話し手の心的態度」という基準によって、主観と客観を截然と区別する立場を取る。

### 参考文献

- 石神照雄(1990)「否定と構文」『日本語学』9 - 12 pp 57 - 67
- 小川輝夫(1984)「否定表現の原理」『文教國文學』14 pp 22 - 39
- 北原保雄(1975)「修飾成分の種類」『國語學』103 pp .18 - 34
- 工藤 浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実(編)『副用語の研究』pp .176 - 198 明治書院
- 小学館辞典編集部(1994)『使い方の分かる 類語例解辞典』小学館
- 杉村 泰(1998)「否定構文に現れる副詞とモダリティ」『ことばの科学』11 pp 93 - 110
- (2000)「モダリティ副詞「マサカ」再考」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』7 pp .11 - 29
- 田中敏生(1983)「否定述語・不確定述語の作用面と対象面 陳述副詞の呼応の内実を求めて」『日本語学』2 - 10 pp .77 - 89
- 丹保健一(1980)「否定表現の文法(1) 否定内容と文構造とをめぐって」『三重大学教育学部研究紀要 人文科学』31 - 2 pp .127 - 136
- 中右 実(1980)「文副詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座 第2巻 文法』pp .157 - 219 大修館書店
- 原由起子(1992)「中国語副詞“竝”と日本語の“決して”」『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』pp 63 - 82 くろしお出版
- 原田登美(1982)「否定との関係による副詞の四分類 情態副詞・程度副詞の種々相」『國語學』128 pp .138 - 122(左1 - 17)
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 本田晶治(1981a)「日本語の否定構文(1) 「否定副詞」の分布をめぐって(前)」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』17 - 1 pp 67 - 88(通170 - 149)
- (1981b)「日本語の否定構文(1) 「否定副詞」の分布をめぐって(2)」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』17 - 2 pp .1 - 23(通234 - 212)
- 森田良行(1988)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 林 巨樹(監修)(1993)『現代国語例解辞典』第二版 小学館
- 松村 明・山口明穂・和田利政(編)(1992)『旺文社国語辞典』第八版 旺文社
- 山田忠雄(主幹)(1989)『新明解国語辞典』第四版 三省堂

Makino, Seiichi and Michio Tsutsui(1995) "A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar" The Japan Times

### 例文の出典

岩田規久男『国際金融入門』岩波新書 / 魚住昭『特捜検察』岩波新書 / 貴志祐介『十三番目の人格 - ISOLA - 』角川ホラー文庫 / 坂本文『たのしい UNIX』アスキー出版局 / 佐高信『タレント文化人100人斬り』現代教養文庫（社会思想社） / 新藤宗幸『行政指導 官庁と業界のあいだ 』岩波新書 / 手塚治虫『ブッダ 』潮ビジュアル文庫 / 手塚治虫『フィルムは生きている』小学館文庫 / 萩原遼『ソウルと平壤』文春文庫 / 福田健『ユーモア話術の本』知的生きかた文庫（三笠書房） / 宮田登『ヒメの民俗学』ちくま学芸文庫 / 矢島裕紀彦『大矢明彦ベ이스ターズの真実』小学館文庫 / 養老孟司・長谷川真理子『男の見方 女の見方』PHP 文庫